

## 「相談のやりとり」からみた中期親子関係

嶋崎 尚子

(早稲田大学文学学術院)

### 【要旨】

本論では、中期親子間での相互作用の動態を、親子間での相談のやりとりに着目して考察する。「親が子の相談相手になる」こと、「子が親の相談相手になる」こととも、母—娘の間で生起率が高く、とくに「親が子の相談相手になる」ことは、子どものライフステージが末子未就学段階で促進されている。また母—息子では、相談やりとりの生起には同居が有意な促進効果を示していた。対照的に父—息子、父—娘ではライフステージに対応した推移を示した。

親子間での相談のありように関する発達の過程のモデルを検討したところ、父—息子、父—娘では「親が子の相談相手になる」→「相互に相談しない」→「子が親の相談相手になる」パターンが、母—息子でも同じパターンが中心的であるが、親子が同居する場合には「親が子の相談相手になる」→「親子で相互に相談相手になる」→「子が親の相談相手になる」パターンが想定される。このパターンは、母—娘では同居に関連なく想定される。このモデルについては今後縦断的に検証することが必要である。

本論をとおして、中期親子間での相互作用が親子の性別組合せごとに異なっていること、すなわち父親よりも母親で活発であること、母親の場合には息子との関係では同居していることが相互作用を促進しているのに対し、娘との関係では空間的距離に関係なく、成人期初期をとおして活発に相互作用がなされていることが明らかになった。

**キーワード：** 相談のやりとり、中期親子関係、ライフステージ、母娘関係

### 1. 研究の目的

本論では、中期親子間における相互作用を相談のやりとりという側面から観察する。いうまでもなく、長寿化によって親子を中心とする世代間関係は長期間継続することになり、かつ少子化によって兄弟姉妹関係を中心とする傍系親族を含む世代間関係の規模が縮小し、少人数での固定的な親子関係が継続している。その結果、親子とも成人である中期親子関係は長期化した。中期親子関係のありようは後期親子関係に影響を与えており、この時期の親子関係への関心が高まっている。

NFRJ を用いた研究でも、NFRJ98 や NFRJ03 を用いて、中期親子間での援助授受を中心とした分析研究が蓄積されている（保田 2004; 大和 2004; 嶋崎 2009; 田淵 2009; 大和 2009）。そこでは親子間での援助の授受が、加齢や子どものライフステージに応じて変化する

ること（保田 2004; 田淵 2009）、親から子への援助は、子どもの経済的自立後にも家族形成期には高い頻度で実施されていること（嶋崎 2009）、かつ母—娘の間で頻繁であること（大和 2004; 嶋崎 2009）、そうした援助は経済的資源や人的ネットワーク資源に恵まれた層ほど頻繁であること（大和 2004）、親から子への援助とくらべて、子から親への援助は加齢過程で変化せず低調であること（保田 2004）が明らかとなっている。また、田淵（2009）は、子ども側の分析から、子どもの年齢が高まると親からの援助は減少するが、親子のつながりは希薄にならず、密接なつながりを持ち続けている点を強調している。嶋崎（2009）では、親側の分析から、成人子との居住距離と援助関係が、中高年期にある親の生活の質を左右し、援助の実施が親の生活の質を低める要因となりうる点を指摘している。

こうした NFRJ98 ならびに NFRJ03 の分析では、親子間の援助を経済的援助と非経済的援助（相談にのってもらったり、看病や手伝いをしてもらう）という2点から把握してきた。しかし非経済的援助には、看病や手伝いという手段的援助と相談という情緒的援助の両方が含まれている点が問題として指摘されてきた。そこで NFRJ08 では、両者を識別するために非経済的援助を、看病や手伝いという手段的援助と、相談にのるという情緒的援助にわけて把握することとした。

むろん、「相談相手になる」「相談にのってもらう」という行為は、経済的援助や手段的援助以上に、実際の内容は多岐にわたることが予想される。たとえば「相談相手」は、人生の重要な局面におけるメンターとして、キャリア形成の手助け、受容、確認、コーチング、カウンセリング、役割モデルといった機能をもっている（Allen & Eby 2004）。一方では日常生活での些細な心配ごとや問題解決にむけた助言（アドバイス）というように、相談内容が具体的な事項ではなく、「頼りにしている」「頼りにされている」という状態を示唆する場合もある。また、相談のやりとりにおいては、経済的援助や手段的援助以上に、相談やりとりの認知が双方で一致するとは限らない点も注意すべきである。相談の受け手からの認知の方が相談の仕手からの認知よりも高くなる可能性もある。

本論の目的は、上記の点に留意しつつ、新たに加えられた親子間での相談のやりとりを用いて、NFRJ98 と NFRJ03 から指摘された中期親子間での経済的援助、非経済的援助にみられた特性を検討し、現代日本における中期親子間での相互作用の動態に再度接近することにある。

## 2. 親子間での相談やりとりに関する仮説

本論では具体的には、「親が子の相談相手になる」と「子が親の相談相手になる」の2変数を従属変数として、以下の4点を検討する。第一に相談のやりとりが親子間でどのように実施されているのか、父—息子、父—娘、母—息子、母—娘の4組ごとに生起率を子どもの年齢別に把握する。その際、親子の組合せによって生起率に差異がみられるのか、父親よりも母親で、母—息子よりも母—娘で生起率が高いのかを検討する。これまで NFRJ98、

NFRJ03 による分析では、経済的援助ならびに非経済的援助の生起は親子の組合せで異なることが指摘されているが、相談においても同様の傾向を予想してすすめる。とくに相談については、先行研究では母—娘において母親が娘のライフコースにおける役割モデルとして機能（逆機能も含め）するという同性の効果が指摘されている（Hamilton & Darling, 1996; Moen & Orrange 2002; Aronson 2007）。この点をふまえると、経済的援助以上に母—娘間での相談やりとりの頻度が高いことが予想される。また子どもの年齢が高いほど「親が子の相談相手になる」ことが低下し、反対に「子が親の相談相手になる」ことが上昇することが予想される。

第二に、相談やりとりの生起に影響をあたえる要因を、子どもの属性・状態と親の属性・状態に着目して検討する。その際とくにライフステージの効果を注目し、経済的援助・非経済的援助と同じく、ここでも家族形成期において「親が子の相談相手になる」ことの頻度が高まることを仮定する。

さらに第三として、親子間での相談のありように関する発達的な変化モデルの検証を行う。すなわち、青年期から成人初期にかけては、人生の先輩として「親が子の相談相手となる」が中心であり、その後「子が親の相談相手となる」へと移行することが予想される。その間、双方が相談しあう時期があるのか、それとも双方が相談しない時期を経るのだろうか。むろん NFRJ08 は横断データであるので、同一親子における発達の過程を縦断的に把握することはできない。ここでは、仮想的モデルとして提示するにとどめる。

第四として、親子間の相談やりとりが情緒的援助であるならば、相談のやりとりは、親子関係を良好にすると予想される。最後にこの点を確認する。なお、分析に先立って、従属変数である相談のやりとりが、経済的援助、手段的援助とは独立して親子間で実施されている点を確認すること、また変数の妥当性の検討をおこなう。

### 3. データと変数

#### 3.1 データ

NFRJ08 では、高年者用調査票・壮年者用調査票に健在子のうち年長3人各人との相談のやりとりの有無、壮年者用調査票・若年者用調査票に健在父母、義父母各人との相談のやりとりの有無として、以下の設問が用意されている。相談の受け手（受ける側）として「この1年間に、この方の相談相手になることはありましたか」、相談の仕手（する側）として「相談にのってもらったことはありましたか」である。それぞれ「はい」「いいえ」の二値変数として利用できる。本論では、「親が子の相談相手になる」ことを  $P \leftarrow C$ 、「子が親の相談相手になる」ことを  $C \leftarrow P$  と表記する。表1のとおり、親への設問では、対象者がもつ複数の子（3人まで）との関係別に相談のやりとりの有無をたずねている。この親への設問を用いると、子どもの属性による相談やりとり有無への効果を識別することが可能になる。そこで、以下では、親の視点からのデータを観察対象とする。

具体的には、NFRJ08 高年・壮年票対象者のうち有子者 2,676 名が対象である。彼らがもっている親子関係、すなわち第一子との関係 2,676 組、第二子 2,347 組、第三子 856 組、のべ 5,879 組の親子関係からなるダイアドデータを作成した。これを親子の組み合わせでみると、父－息子 1,409 組、父－娘 1,335 組、母－息子 1,617 組、母－娘 1,518 組である。なお、子どもの視点からの回答については、参考データとして適宜利用していく。

表 1 NFRJ08 における親子間での「相談のやりとり」設問

	親が子の相談相手になる P←C	子が親の相談相手になる C←P
親への設問（高年・壮年）	親側回答 *（第3子まで）子の属性別に 識別可能	親側回答 *（第3子まで）子の属性別に 識別可能
子への設問（壮年・若年）	子ども側回答 *父母別に識別可能	子ども側回答 *父母別に識別可能

### 3.2 従属変数

既述のように、NFRJ08 では、「相談相手になる」「相談にのってもらう」という相互行為を情緒的援助として、経済的援助や手段的援助とは独立した現象としてとらえている。分析をはじめるときにあたって、この点を確認しておく必要がある。表 2 では、親子間での「相談のやりとり」有無と経済的援助、手段的援助の有無との関連性を、対象者（親側）の出生コーホート別に  $\varphi$  係数で示したものである。表から明らかのように、統計的に有意ではあるものの  $\varphi$  係数は全体としては中程度であった。以下では、親子間での「相談のやりとり」を経済的援助や手段的援助とは独立した現象として扱っていく。

表 2 親子間での「相談のやりとり」と援助授受との関係（ $\varphi$  係数）（n=5,879）

親のコーホート	P←C（親が子の相談相手）有無と		C←P（子が親の相談相手）有無と	
	子への経済的援助 の有無	子への手段的援助 の有無	子からの経済的被 援助の有無	子からの手段的援 助の有無
男性 1936-40	.228***	.262***	.299***	.391***
1941-50	.356***	.252***	.185***	.278***
1951-60	.252***	.194***	.217***	.197***
女性 1936-40	.247***	.289***	.208***	.370***
1941-50	.290***	.296***	.062***	.405***
1951-60	.251***	.206***	.233***	.276***

\*\*\*  $p < .001$

また、「相談のやりとり」に関する変数が情緒的援助を測定しているか、その妥当性についても検討しておく必要がある。ここでは、「問題を抱えて、落ち込んだり、混乱したときに」に当該カテゴリーを頼りにするかどうかとの関連を検討する。ただし、設問の関係上、頼りにするか否かについては「子ども」「自分の親」というカテゴリーでの把握にとどまり、当該子もしくは当該親に限定することができない。そのため、参考程度にとどめざるをえないが、確認しておく。

具体的には、「親が子の相談相手になる」 $P \leftarrow C$ の有無と親（父母の識別なし）を頼りにするかと、「子が親の相談相手になる」 $C \leftarrow P$ の有無と子ども（当該子とはかぎらず）を頼りにするかとの関連をみていく。前者では子ども側の回答を利用できる。その結果、父親との間での相談有無（ $P \leftarrow C$ ）と親を頼りにするかとの関係では、 $\phi=.297$ 、 $p < .001$ 、母親との間  $\phi=.420$ 、 $p < .001$ と中程度の関連性を確認できた。他方、後者では、親からの回答を利用する。「子の相談相手になる」と子どもを頼りにするとの間には、男性（父親）で  $\phi=.136$ 、 $p < .001$ 、女性（母親）で  $\phi=.230$ 、 $p < .001$ であり、前者ほどの関連性は認められなかった。これは、前者以上に、子どもを当該子に限定していないことによる影響が強いことを反映している。以上から、十分な検討とはなっていないが、本論で用いる「相談のやりとり」が、親子間での情緒的援助を測定しているものと判断し、以下の分析をすすめていく。

## 4. 分析結果

### 4.1 親子間での相談のやりとり

#### (1) 「親が子の相談相手になる」 $P \leftarrow C$

では親子間での「相談のやりとり」がどのように生起しているかを確認しよう。図1は、父—息子、父—娘、母—息子、母—娘の各組について、子どもの年齢別に「親が子の相談相手になる」 $P \leftarrow C$ の生起率を示したものである。

当初の予想どおり、4組での $P \leftarrow C$ の生起率を比較すると、いずれも子どもの年齢が低いほど高く、年齢が高いと低くなっている。さらに子どもの年齢が20歳以下、21-25歳では母—息子、母—娘の間での生起率が父—息子、父—娘よりも高い。そして、この図においてもっとも特徴的な点は、母—娘での生起率がいずれの年齢においても顕著に高いことである。すなわち父親よりも母親で子どもの相談相手になりやすく、かつ母親では息子との間よりも娘との間で高い。また子どもの年齢との関連では、息子の場合には子どもの年齢が低いほど相談にのる比率が高く、子どもの年齢が高いほど低くなる。対照的に、娘の場合には娘が30歳未満では年齢に関連なく80%を超えている。この点は以下で留意していく。他方で、男性（父親）側からの評価では、子どもの相談相手となることは子どもの性別とはほぼ関連なく、ゆるやかに子どもの年齢の上昇にともなって低下している。

むろんNFRJ08は一時点での横断データであるので、そこから同一集団の発達の過程を描くことは不可能である。しかし、 $P \leftarrow C$ の生起率が子どもの年齢に応じて低下していること

は、子どもの発達過程において「親が子の相談相手になる」ことがしだいに発生しにくくなるという発達のモデルを予想させるものである。

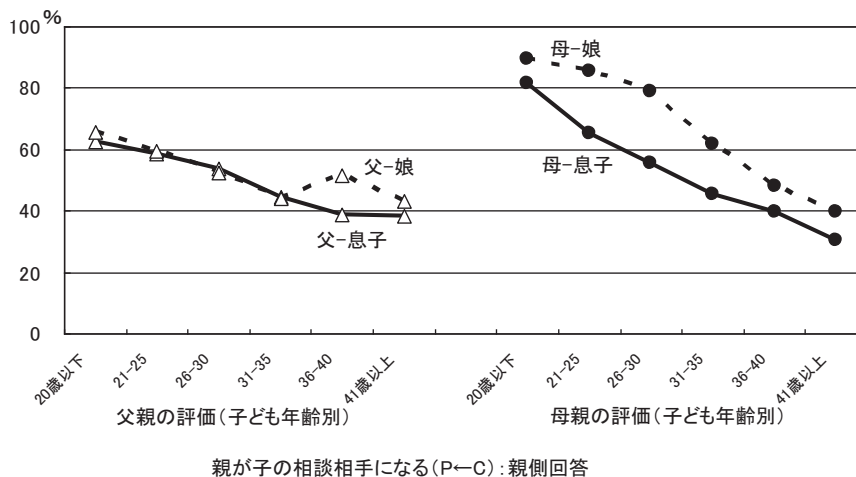


図1 親が子の相談相手になる P←C (親側回答) (n=5,879)

ちなみに、P←Cの生起率を子どもの側からの評価でみると(図2)、いずれのグループでも親側からの評価よりも低いものの、年齢ならびに性別での傾向は親側の回答とほぼ同様の結果を示している。親側からの評価よりも子ども側からの評価で生起率が低い点、すなわち相談をもちかける方からの評価の方が、受ける側からの評価よりも相対的に低いことは、経済的援助や手段的援助にもみられた傾向である(経済的・非経済的援助の場合には援助する側からの評価が援助を受ける側からの評価よりも低い)(保田 2004)。

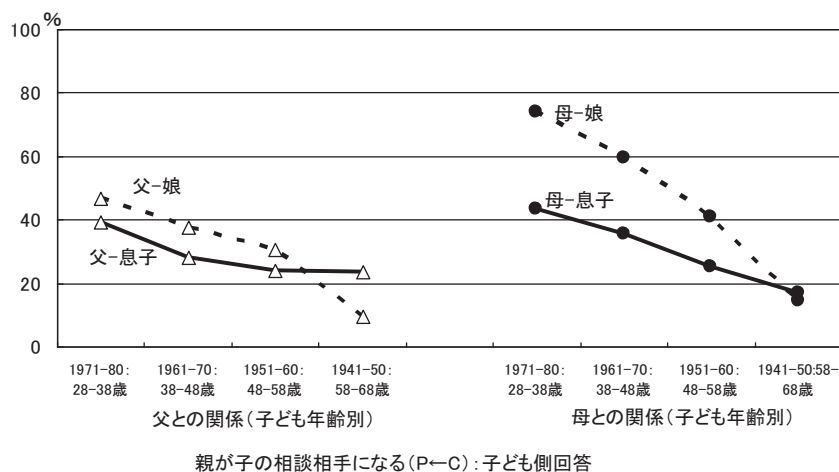


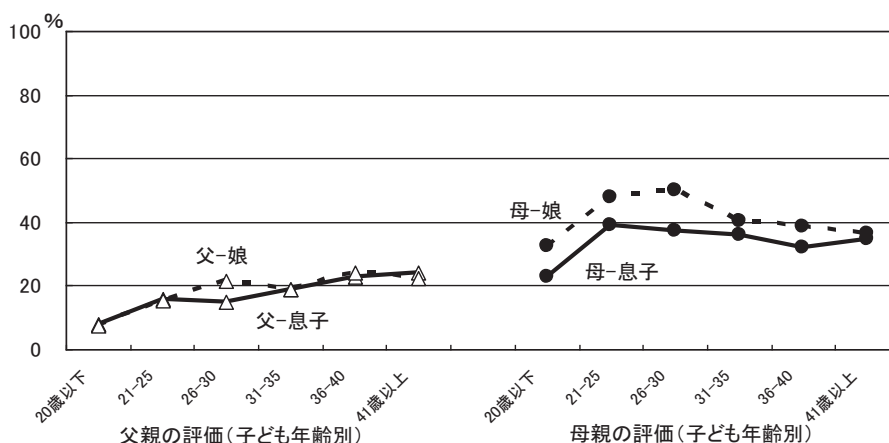
図2 親が子の相談相手になる P←C (子ども側回答) (n=3,107)



(2) 「子が親の相談相手になる」 C←P

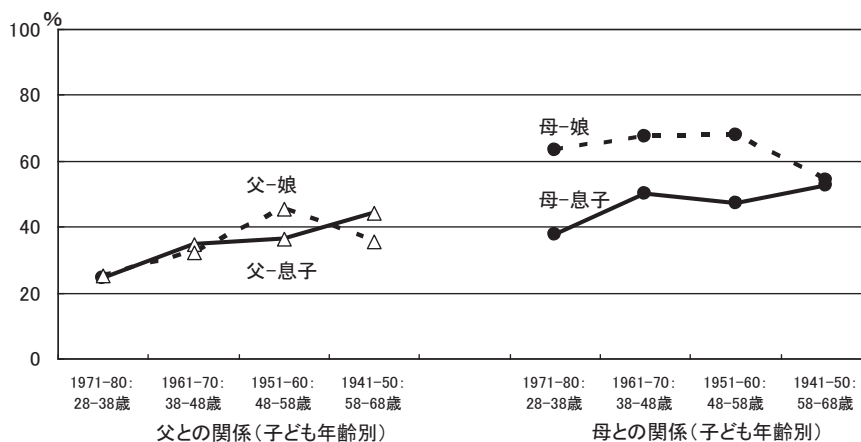
つづいて、「子が親の相談相手になる」C←Pの生起率をみよう。図3のように、親側からの評価ではP←Cよりも生起率は一貫して低い。母においては21-25歳、25-30歳でもっとも高くなる逆U字型を示している。また子どもの年齢別にみると、父—息子、父—娘の場合には、年齢が高いほど生起率が高いという傾向がみられる。子どもの発達過程に応じて、「子が親の相談相手になる」ことが発生しやすくなることを予想できる。しかし、母—息子、母—娘の間では、年齢に呼応した傾向はみられない。

参考までに子ども側の回答をみると(図4)、こちらの生起率の方が親側の値よりも高い。これはP←Cと同じく、相談を受けるという認知の方が、相談したという認知よりも高いという一貫した回答傾向を支持している。



子が親の相談相手になる(C←P): 親側回答

図3 子が親の相談相手になる C←P (親側回答) (n=5,879)



子が親の相談相手になる(C←P): 子ども側回答

図4 子が親の相談相手になる C←P (子ども側回答) (n=3,281)

### (3) 相談のやりとりと年齢の関係

このように、相談のやりとりの生起率には、子どもの年齢との関係がみられる。本論では、発達過程における親子間でのやりとりの変化に関する仮説を導出していくが、その前提として年齢との関連を確認しておく。表3は、P←C、C←Pと子どもの年齢、親の年齢との相関係数をみたものである。これによると、P←Cについては、子どもの年齢、親の年齢とも負の関係をもっている。その値は、父—息子、父—娘よりも、母—息子、母—娘で強い。C←Pでは、父—息子、父—娘で正の関連を示しているが、その値はP←Cほど高くはない。他方、母—息子、母—娘では、有意な関連は認められない。

表3 各相談の生起率に対する年齢の効果（相関係数）

	P←C（親が子の相談相手）		C←P（子が親の相談相手）	
	子どもの年齢	親の年齢	子どもの年齢	親の年齢
父—息子 (n=1,409)	-.172***	-.163***	.136***	.113***
父—娘 (n=1,335)	-.126***	-.113***	.142***	.104***
母—息子(n=1,617)	-.307***	-.278***	.013	-.011
母—娘 (n=1,518)	-.380***	-.372***	-.041	-.050

\*\*\* $p < .001$

## 4.2 相談の規定要因

### (1) 「親が子の相談相手になる」P←C

では、中期親子間での相談のやりとりは、どのような状況で生じているのだろうか。ここでは、4組の親子間での相談の生起の有無を従属変数とした重回帰分析を行い、その規定要因を検討する。

「親が子の相談相手になる」P←Cについては、子どもの属性、当該親子間での経済的援助、手段的援助の状態に着目してその影響を確認する。まず、子どもの属性による影響については、具体的な独立変数として、子どもの出生順位（1～3）、親子の空間的距離（同居＝1）、親との性別異同（同性＝1）、子どものライフステージを用いる。ライフステージは、保田（2004）による3段階の分類を拡大して、以下のように末子の発達段階に着目した5段階を設定した<sup>1</sup>。なお、L5については該当数が少ないので、対象から除外する。重回帰分析では、L1をレファレンスカテゴリーとし、L2、L3、L4それぞれをダミー変数として投入する。さらに当該子への親からの経済的援助の有無（あり＝1）、サービスの提供の有無（あり＝1）を加える。

<sup>1</sup> ここでの分類は、相互排他的なカテゴリーとしたので、無配偶で子どももっている者264は対象から除外される。



- L1：配偶者なし (n=2,644)
- L2：有配偶で子どもなし(n=872)
- L3：有配偶で末子が未就学である (n=1,109)
- L4：有配偶で末子が小学生以上 18 歳未満である (n=877)
- L5：有配偶で全ての子どもが 18 歳以上である (n=113)

「子が親の相談相手になる」C←Pについては、P←Cでの子どもの属性のほか、当該親子間での援助として、当該子からの経済的援助の有無、(あり=1)、手段的援助の有無(あり=1)をあてはめる。さらに、親側の状態による影響として、配偶状態(有配偶=1)、就業状態(父親のみ)(就業=1)、健康状態(たいへん良好=5~たいへん悪い=1)の3変数を加える。以上の重回帰分析で用いる独立変数の分布は表4のとおりである。

表4 分析対象とする親子の概要

	父—息子	父—娘	母—息子	母—娘
n	1343	1221	1532	1386
当該子との同居率	44.7%	40.0	41.8	35.5
第一子	46.7%	44.8	45.9	43.1
第二子	39.0%	41.2	38.8	41.6
第三子	14.3%	14.0	15.3	15.4
子どものライフステージ				
L1：配偶者なし	53.8%	47.7	49.0	41.9
L2：有配偶・子なし	17.3%	16.1	14.8	15.4
L3：末子未就学	17.4%	20.2	20.8	22.2
L4：末子小学生以上18歳未	11.5%	16.1	15.3	20.6
親：有配偶率	93.2%	93.0	85.3	84.3
親：就業率	74.0%	76.2	54.1	52.0
親の健康状態				
たいへん良好	9.2%	10.2	8.0	7.6
まあ良好	57.8%	56.3	58.2	61.2
どちらともいえない	18.8%	19.2	18.1	17.8
やや悪い	12.0%	11.6	13.0	11.0
たいへん悪い	2.2%	2.6	2.7	2.5
当該子への経済的援助率	36.9%	38.2	34.4	34.7
当該子への手段的援助率	16.0%	24.3	27.1	37.1
当該子からの経済的援助率	8.5%	8.7	14.7	15.2
当該子からの手段的援助率	18.0%	29.6	26.2	40.0

「親が子の相談相手になる」P←Cの生起率にかんする重回帰分析の結果を検討しよう(表5)。ここでは3つのモデルを検証した。いずれのモデルも、適合度は高くはなかった。モデル1は、父—息子、父—娘を合わせて父親、母—息子、母—娘を合わせて母親として子どもの属性による効果をみたものである。父親・母親に共通して、子どものライフステージL2、L3、L4の係数はマイナスを示しており、無配偶であるL1よりも「親が子の相談相手になる」ことが低いことを示している。しかしその傾向は、ライフステージの上昇と直

線的に減少するのではなく、「有配偶で子どもが未就学」である L3 で若干高くなるという逆 U 字型を示している。つまり、L3 の時期には、前後のステージよりも「親が子の相談相手になる」ことが高まっていることになる。この点は、先に指摘した母—娘にみられた子どもが 20 歳代での P←C の生起率が一定である点との関連を示唆する特徴であり、モデル 3 で検討を進める。

父親・母親とで対照的な結果を示しているのが、子どもの性別の効果と子どもとの同居の効果である。両変数とも父親では有意な効果はみられないが、母親の場合には、有意な正の値を示している。つまり、母親では同性効果として息子よりも娘との間で「親が子の相談相手にな」りやすく、また同居している方が相談にのることが多いのである。子どもの出生順位は、いずれにおいても有意ではなかった。

こうした傾向をふまえたうえで、モデル 2 とモデル 3 では、親子の組み合わせ別に検証している。モデル 2 は、モデル 1 から親子の性別を除いたものである。父—息子の場合、ライフステージの効果は L4 のみが有意である。父—娘では L2、L3、L4 とも有意な負の効果を示している。母親についてみると、モデル 1 でみられた未就学の子をもつライフステージの効果と同居の効果という 2 つの特性は、母—息子、母—娘で別々に現れている。すなわち、息子との間では、L3、L4 が有意な負の効果をもつだけでなく、同居がもっとも強い正の効果を示している。息子と同居している場合「親が子の相談相手にな」りやすいのである。しかし、この効果は母—娘ではみられない。母—娘の場合には、未就学の子をもつ L3 での係数が L2、L4 と比して小さくなっている。モデル 1 で指摘した 20 歳代での母—娘間での P←C 生起率の一定性が、ライフステージによる特性であることを確認できる。

つづくモデル 3 は、子どもの属性のうち同別居とライフステージのほかに、子どもへの経済的援助の有無と子どもへの手段的援助の有無を加えたモデルである。父親—息子の場合にはモデル 2 と同様に L4 のみが有意であった。父—娘の場合には、ライフステージのほかに、子への手段的援助が負の効果を示している。手段的援助をしている場合に相談にのることが減少するという結果である。

これに対して、母親の場合には、母—息子で、モデル 2 と同様の効果のほかに子への手段的援助との間に有意な正の効果がみられる。手段的援助をしている場合に相談にのることが増すという結果である。娘との間には、モデル 2 と同様のライフステージの効果のみがみられた。

このように「親が子の相談相手になる」生起率にかんする重回帰分析結果から、4 組の親子間に共通して、ライフステージの上昇によって相談相手になることが低くなることは指摘できる。しかし母親の場合には、息子よりも娘との間で相談が生じやすく、かつ異なる効果が示された。母—息子の場合には、同居が相談相手になることを有意に促進していた。母—娘の場合には、ライフステージのうち末子が未就学段階の場合に、前後のライフステージとくらべると相談が生じやすく、この点は年齢別にみた場合、20 歳代で一貫して生起率が高水準であったことを説明している。

表5 「親が子の相談相手になる」P←Cの生起率にかんする重回帰分析（標準化係数β）

独立変数	父				
	全体	父—息子		父—娘	
	モデル1	モデル2	モデル3	モデル2	モデル3
子ども性別（同性=1）	-.031				
子ども出生順位（1~3）	.005	.004		.005	
同居（=1）	-.017	.050	.050	-.027	-.027
子どものステージ L2	-.060**	-.033	-.033	-.077*	-.080**
L3	-.049*	-.011	-.011	-.068*	-.072*
L4	-.088***	-.091**	-.090**	-.075*	-.078**
子への経済的援助(=1)			-.026		-.033
子への手段的援助(=1)			.016		-.058*
R <sup>2</sup>	.010***	.013**	.014**	.010*	.015**
Adjusted R <sup>2</sup>	.008	.009	.009	.006	.010
n	2549	1334	1334	1215	1215

独立変数	母				
	全体	母—息子		母—娘	
	モデル1	モデル2	モデル3	モデル2	モデル3
子ども性別（同性=1）	.179***				
子ども出生順位（1~3）	-.013	.001		-.031	
同居（=1）	.129***	.175***	.175***	.059	.057
子どものステージ L2	-.075***	-.049	-.049	-.118***	-.118***
L3	-.051	-.061*	-.058*	-.059	-.060
L4	-.192***	-.142***	-.142***	-.272***	-.270***
子への経済的援助(=1)			-.044		.016
子への手段的援助(=1)			.060*		.007
R <sup>2</sup>	.090***	.064***	.067***	.081***	.081***
Adjusted R <sup>2</sup>	.088	.061	.064	.078	.077
n	2912	1528	1528	1384	1384

\*  $p < .05$  \*\*  $p < .01$  \*\*\*  $p < .001$

## (2) 「子が親の相談相手になる」C←P

つぎに「子が親の相談相手になる」C←Pについてみよう。表6のとおり、ここでは4つのモデルを検討した。「子が親の相談相手になる」は、単純に考えるならば「親が子の相談相手になる」P←Cの分析結果とは逆方向の独立変数の効果が予想される。P←Cの結果をふまえてC←Pの規定要因をみていこう。

モデル1では、子どもの属性、子のライフステージ、同別居のほかに、親の就業状態（父親のみ）、配偶状態、健康状態を加えている。父親では、ライフステージの効果はP←Cとは反対に正の方向を示している。さらに親の就業状態は負の方向、すなわち父親が無就業の場合に「子が親の相談相手になる」ことが増すという結果である。母親の場合にもライフステージの効果は正の方向を示しているがいずれも有意ではない。また、母親ではP←Cと同じく、子どもの性別と同居が正の効果をもっている。また親の配偶状態は負の効果を示している。母親が無配偶の場合に「子が親の相談相手になる」ことが増すという結果である。

つづいて4組の親子組合せごとに検証しよう。モデル1から子どもの属性を減らしたモデ

ル2では、父—息子ではモデル1と同じく各ライフステージで正の効果がみられる。とくにL3で強い効果がみられる。また、父親が無業の場合に「子が親の相談相手になる」っている。父—娘をみると、ライフステージではL3のみが有意であり、父—息子同様、他のステージよりも高い。この組合せでは父親の健康状態がもっとも係数が大きく、健康状態が悪いほど「子が親の相談相手になる」傾向を示している。

母親の場合には、 $P \leftarrow C$ と同じく、母—息子では同居が正の効果を示している。ライフステージの効果はみられない。そのかわり母親の配偶状態が負の効果を示している。このことは、母—息子間では母親が無配偶で当該子と同居している場合に、「子が親の相談相手になる」傾向が有意に促進されることを示している。これに対し、母—娘では、母—息子と同様の配偶状態と同居の効果に加えて、ライフステージの効果もみられる。L2、L3の場合に正の効果を示している。それに対しL4は有意ではないが効果の方向は負である。母—娘間では、 $P \leftarrow C$ と $C \leftarrow P$ ともL4で負の効果を示している。このことは、以下で発達過程を検討する際に注目すべき点である。

モデル3は、親の状態ではなく子からの経済的援助の有無、手段的援助の有無を加えたものである。4組の親子関係ごとに効果の方向が異なっており、父—息子では両者とも負であるのに対し、母—息子、母—娘では両者とも正の方向である。とはいえ、父親、母親ともにこの2変数の係数は強くはない。その結果、モデル2とモデル3とを合わせたモデル4では、4組ともモデル2と同様の効果が維持されている。

このように「子が親の相談相手になる」生起率にかんする重回帰分析結果から、母—息子を除く3組の親子間で、L2、L3において相談相手になることが高くなることは指摘できる。L4については父親の場合にはL2、L3と同じく正の効果を示すのに対し、母親の場合には負の効果を示している。また、父—息子では、父の就業状態が負の効果を、父—娘では父の健康状態が負の効果を示している。母親の場合には、息子、娘とも同居が正の効果を示し、さらに母親の配偶状態が負の効果をもっている。

表6 「子が親の相談相手になる」C←Pの生起率にかんする重回帰分析（標準化係数β）

独立変数	父						
	全体	父—息子			父—娘		
	モデル1	モデル2	モデル3	モデル4	モデル2	モデル3	モデル4
子ども性別（同性=1）	-0.008						
子ども出生順位（1～3）	-0.031						
同居（=1）	-0.011	.052	.047	.051	-.015	-.016	-.013
子どものステージ							
L2	.057**	.081**	.091**	.080**	.043	.044	.043
L3	.079***	.106**	.116***	.106***	.073*	.074*	.072*
L4	.050*	.067*	.095**	.069*	.043	.062*	.043
親：就業状態（就業=1）	-.042*	-.063*		-.062*	-.009		-.009
親：配偶状態（有配偶=1）	.004	.038		.039	-.027		-.028
親：健康状態（1～5）	-.006	-.010		-.010	-.126***		-.126***
子からの経済的援助（=1）			-.024	-.024		.019	.020
子からの手段的援助（=1）			-.016	-.013		-.015	-.012
R <sup>2</sup>	.013***	.020**	.017**	.021**	.024***	.008	.025***
Adjusted R <sup>2</sup>	.009	.015	.013	.014	.019	.003	.018
n	2531	1326	1326	1326	1205	1205	1205
独立変数	母						
	全体	母—息子			母—娘		
	モデル1	モデル2	モデル3	モデル4	モデル2	モデル3	モデル4
子ども性別（同性=1）	.074***						
子ども出生順位（1～3）	-.034						
同居（=1）	.120***	.137***	.141***	.138***	.096**	.097**	.096**
子どものステージ							
L2	.028	-.004	-.002	-.004	.062*	.063*	.061*
L3	.042	.014	.022	.015	.072*	.079*	.071*
L4	-.024	-.002	.009	-.003	-.039	-.031	-.039
親：配偶状態（有配偶=1）	-.103***	-.121***		-.122***	-.084**		-.082**
親：健康状態（1～5）	-.024	-.024		-.024	-.022		-.022
子からの経済的援助（=1）			.006	.001		.038	.034
子からの手段的援助（=1）			.036	.038		.005	.004
R <sup>2</sup>	.031***	.033***	.019***	.034***	.024**	.018***	.025**
Adjusted R <sup>2</sup>	.028	.029	.015	.029	.020	.014	.019
n	2905	1522	1522	1522	1383	1383	1383

\*  $p < .05$  \*\*  $p < .01$  \*\*\*  $p < .001$ 。母については「親：就業状態」はモデルに含めない。

#### 4.3 「親子間での相談のやりとり」の発達の過程

ここまで親子間での相談のやりとりを「親が子の相談相手になる（P←C）」と「子が親の相談相手になる（C←P）」の2変数からみてきた。この2方向のやりとりは、相互排他的になされるのか、あるいは互酬的になされるのだろうか。2つのやりとりの組合せをみると、表7のとおり、全体では「両方ともなし」39%、「P←Cのみ」33%、「両方あり」22%、「C←Pのみ」6%である。すでにみてきたように、親子間の相談のやりとりは、子どものライフステージが影響している。すなわち、発達的に変化することが想定される。むしろ、NFRJ08はパネルデータではないので、個体水準での発達の過程をとらえることはできない。以下では、ライフステージ横断的視点からデータを観察し、その結果から発達の過程に関する仮説の導出を試みたい。

表7 「親子間での相談のやりとり」の組合せ (%)

	N	両方	P←Cのみ	C←Pのみ	なし
全体	5434	22.2	32.7	6.1	39.1
父-息子	1325	13.1	37.1	3.9	45.8
父-娘	1209	14.1	38.5	3.5	43.8
母-息子	1519	25.3	25.2	9.5	40.0
母-娘	1381	34.4	31.6	6.7	27.3

図5には、子どものライフステージ別に親子間での相談のやりとりの組合せを示した。この図から、「P←Cのみ」の比率は、4組のなかでほぼライフステージの上昇に呼応して低下している。それに対し、「C←Pのみ」は、父-息子、父-娘でとりわけ比率が小さく、ライフステージとの明確な対応はみられない。母-息子では10%程度で一貫している。母-娘ではL2でもっとも高いものの、他のステージでは母-息子ほど高くはない。「両方」の比率は、父-息子、父-娘で低く、母-息子では一貫して2割を超えている。さらに母-娘ではL1、L2、L3で30%を超える比率であり、とりわけL3で39%と高率である。このように「P←Cのみ」「C←Pのみ」「両方」という「なんらかの相談がなされている」比率は、父-息子、父-娘では、父-息子のL4を除いては、ライフステージによる差はみられず、半数程度と考えられる。視点をかえれば、半数の親子ではいずれの相談もなされていないことになる。一方、母-息子では、L1でなんらかの相談の比率が高い点の特徴であり、そのほかのステージは父-息子、父-娘と同様である。これに対し、母-娘はL1、L2、L3でなんらかの相談がなされている比率が75%前後におよんでいる。この点は、年齢別にみた生起率が20代をとおして一貫して高いことと合致している。さらに、4組のうち父-息子、母-息子、母-娘の3組ではL4での相談やりとりは、全体に低調である。この点は重回帰分析において、L4のみが「P←C」「C←P」とも負の効果を示していた点と合致する。これが、ライフステージによる特徴か、コーホートによる特徴かについては、今後、縦断的に検討してはじめて明らかになる。



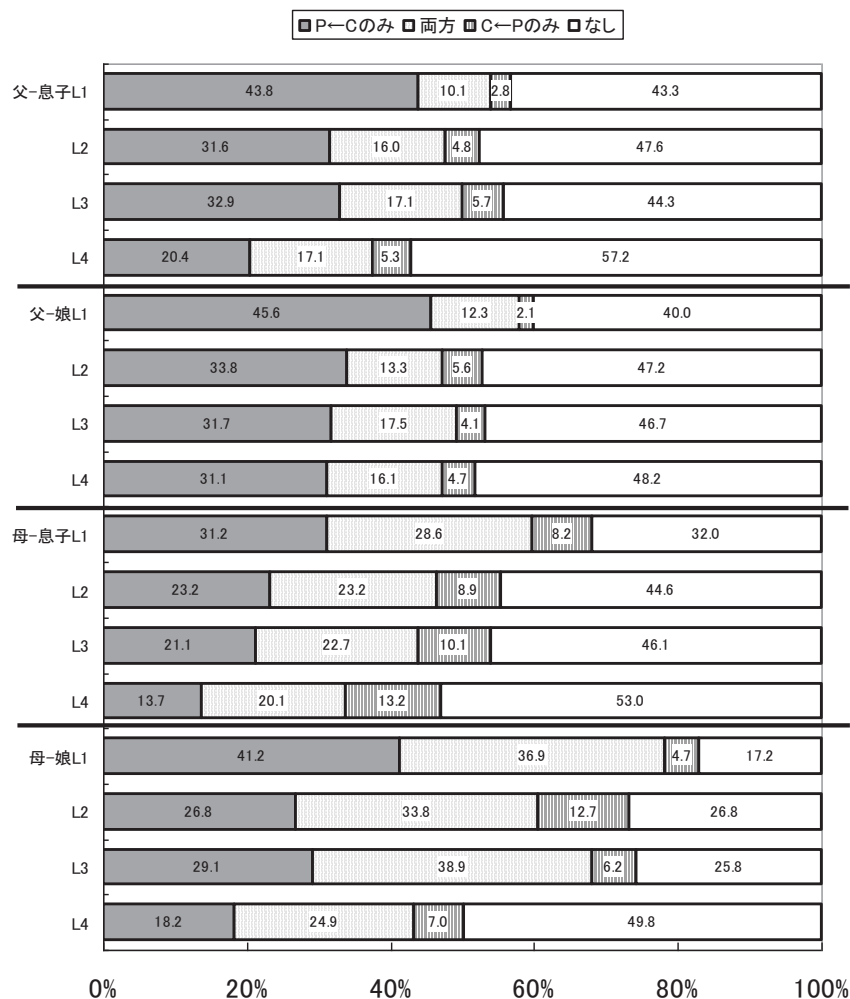


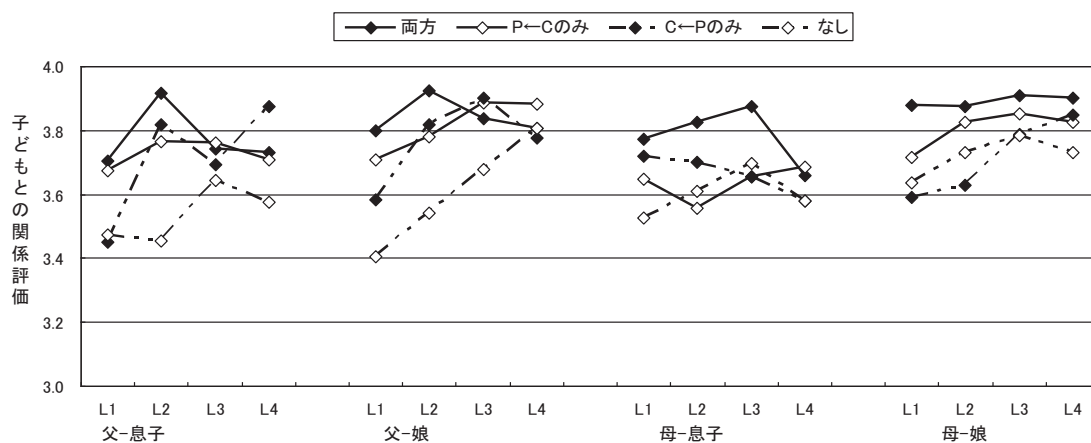
図5 子どものライフステージと親子間での「相談のやりとり」（親側回答）(n=5,434)

以上をふまえたうえで、親子間での相談のやりとりの発達的变化について仮説を検討しよう。親子間での相談やりとりとしては、2つの過程が考えられる。すなわち「親が子の相談相手になる (P←C)」→「親子で相互に相談相手になる (両方)」→「子が親の相談相手になる (C←P)」というパターンと「親が子の相談相手になる (P←C)」→「相互に相談しない (なし)」→「子が親の相談相手になる (C←P)」というパターンである。両者は、中期親子関係における相談のやりとりの有無による違いである。本論における横断データの分析から、以下の仮想的モデルを導出したい。すなわち、父-息子、父-娘では「相互に相談しない」を経るパターンが中心的である。母-息子では「相互に相談しない」が中心的であるものの、親子が同居する場合には「相互に相談相手になる」を経るパターンも生じやすい。それに対し、母-娘では親子が同居するかに関連なく、「相互に相談相手になる」を経るパターンをたどるというモデルである。

#### 4.4 親子間での「相談のやりとり」と親子関係

最後に、親子間での相談のやりとりは親子関係評価に影響をあたえるかについて検討しておきたい。親子間での相談のやりとりを情緒的援助とみなすならば、直近1年間における情緒的援助の生起は、当該子との関係評価を高めることが予想される。そこで、当該子との関係評価（「この方との関係はいかがですか」との問い、4＝良好、3＝どちらかといえば良好、2＝どちらかといえば悪い、1＝悪い）をみていく。

図6に相談やりとりの組合せ別の当該子との関係評価の平均値を、ライフステージ別に示した。いずれの親子組合せにおいても「相互に相談相手にな」っている場合にその子どもとの関係評価が高い傾向がみられる。とくにこの傾向はライフステージのうち、L1、L2ではあてはまる（分散分析でも有意である）。父親の場合には、総じて「相互に相談しない」場合に関係評価が低く、父－息子ではいずれのライフステージにもあてはまる。父－娘では、とりわけライフステージが低い場合にあてはまる。母親の場合には、母－息子では、L1、L2では「相互に相談相手にな」っている場合と「子が親の相談相手になっている」場合（図中の◆）に関係評価が高い。すでにみたように母－息子では、当該子と同居している場合にそうした相談が有意に発生しやすいことを考えると、これらは同居子との関係の良好さを示唆しているともいえる。他方で、母－娘では、もっとも相談が活発であった未就学子をもつL3では4つの組合せとも評価が高く、相談のやりとり自体による影響は読み取れない。



父－息子：L1  $p < .001$ 、L2  $p < .001$ 、L3 n.s.、L4 n.s.  
 父－娘：L1  $p < .001$ 、L2  $p < .05$ 、L3  $p < .001$ 、L4 n.s.  
 母－息子：L1  $p < .001$ 、L2 n.s.、L3  $p < .05$ 、L4 n.s.  
 母－娘：L1  $p < .001$ 、L2 n.s.、L3 n.s.、L4 n.s.

図6 親子間での「相談のやりとり」と当該子との関係評価（親側回答）(n=5,434)

## 5. まとめ

本論では、中期親子間での相互作用の動態を、親子間での相談のやりとりを用いて、検討してきた。具体的には、直近1年間における「親が子の相談相手になる」ことの有無と「子が親の相談相手になる」ことの有無の2変数を従属変数として親側の回答を用いて、以下の4点を検討した。

まず、第一に親子間でどのように相談のやりとりが実施されているのかを、父—息子、父—娘、母—息子、母—娘の4組ごとにみた。「親が子の相談相手になる」 $P \leftarrow C$ 頻度は、子どもの年齢が低いほど高く、年齢が高いと低くなっている。予想どおり、母—娘での生起率がいずれの年齢においても顕著に高く、父親よりも母親で子どもの相談相手になりやすく、かつ母親では息子との間よりも娘との間で高い結果であった。さらに母—娘の場合には、娘が30歳未満では年齢に関連なく80%を超えていた。反対に、「子が親の相談相手になる」 $C \leftarrow P$ の生起率は、親側からの評価では $P \leftarrow C$ よりも生起率は一貫して低く、この点は経済的援助等と同様であった。子どもの年齢との関連では、 $P \leftarrow C$ とは反対に年齢が高いほど生起率が高いという傾向が父—息子、父—娘でみられ、子どもの発達過程に応じて、「子が親の相談相手になる」ことが発生しやすくなることがわかる。しかし、母—息子、母—娘の間では、年齢に呼応した傾向はみられなかった。

つぎに、「親が子の相談相手になる」生起率にかんする重回帰分析を行ったところ、4組の親子間に共通して、ライフステージの上昇によって相談相手になることが低くなる点は指摘できた。母親—娘間での相談は、ここでも有意に生じやすく、とくに娘のライフステージが末子未就学段階で促進されており、「親が子の相談相手になる」ことが家族形成期において相談頻度が高まるという仮説が支持された。他方で、母—息子の場合には、当該息子との同居が相談相手になることを有意に促進していた。

また「子が親の相談相手になる」生起率にかんする重回帰分析では、母—息子を除く3組の親子間で、有配偶で子どもなしの段階(L2)と末子が未就学の段階(L3)において相談相手になることが高い点が指摘された。親側の属性をみると、父—息子では、父の就業状態が負の効果を、父—娘では父の健康状態が負の効果を示している。母親の場合には、息子、娘とも同居が正の効果を示し、さらに母親の配偶状態が負の効果(無配偶の場合に高い)をもっていた。

これらの結果をふまえ、親子間での相談のありように関する発達的な変化モデルとして、「親が子の相談相手になる( $P \leftarrow C$ )」→「親子で相互に相談相手になる(両方)」→「子が親の相談相手になる( $C \leftarrow P$ )」というパターンと「親が子の相談相手になる( $P \leftarrow C$ )」→「相互に相談しない(なし)」→「子が親の相談相手になる( $C \leftarrow P$ )」という2パターンを検討した。横断データであるNFRJ08からは、親子の組合せ別に以下の仮想的モデルを導出した。すなわち、父—息子、父—娘では「相互に相談しない」を経るパターン、母—息子では「相互に相談しない」が中心的であるが、親子が同居する場合には「相互に相談相手になる」

を経るパターン、それに対し、母—娘では親子が同居するかに関連なく、「相互に相談相手になる」を経るパターンをたどるというモデルであった。

最後に、情緒的援助である親子間での相談のやりとりが、当該子との関係評価を高めることを確認した。たしかにいずれの親子組合せにおいても「相互に相談相手にな」っている場合にその子どもとの関係評価が高い傾向がみられた。とくにその傾向は、ライフステージのうち、未婚の段階（L1）と有配偶で子どもなしの段階（L2）にあてはまる。また母—息子では、L1、L2では「相互に相談相手にな」っている場合と「子が親の相談相手になっている」場合に関係評価が高い。しかし、母—娘では、相談のやりとり自体による影響は読み取れなかった。むしろ、こうした性別による特性は、本論冒頭で指摘した「相談相手になる」「相談にのってもら」いう行為自体の多義性を反映している可能性があることを付言しておく。

以上、これまでの NFRJ98 ならびに NFRJ03 での経済的援助、非経済的援助に加えて、相談という情緒的援助の分析をとおして、中期親子間での相互作用のありようが、親子の性別組合せごとに異なっていることを確認できた。全体として父親よりも母親で活発であること、母親の場合には息子との関係では同居していることが相互作用を促進しているのにたいし、娘との関係では空間的距離に関係なく、成人期初期をとおして活発な相互作用がなされていることが明らかになった。

最後に本論の限界と課題について整理しておきたい。本分析では、NFRJ08 から新たに加えられた「相談のやりとり」という情緒的サポート変数が、親子間の相互作用を測る項目として利用できることは明らかとなった。しかし、繰り返しになるが、情緒的サポートのやりとりの多義性ならびに親子間関係の良好さとの関連については、今後検討する必要がある。またここでは、「相談のやりとり」の生起をライフステージに着目して観察したが、むしろ階層などの親子属性との関連性を考慮に入れたモデルも検討すべきであろう。

分析技法上の課題としては、以下の2点が課題である。まず、対象者個人がもつ複数の親子関係を個別に扱うダイアドデータを利用しているため、マルチレベル分析を行なわねばならないという点である。とりわけ同居の効果については、多くの場合対象者個人が同居する子どもは1名に限定されるため、他の子どもとの関係にも影響をおよぼすことが考えられる。マルチレベル分析によって再度効果を測定する必要がある。つぎに、本論では相談のやりとりに関する発達の過程に関するモデルを提示したが、いうまでもなく、このモデルについては、今後 NFRJ08 パネルデータを用いた検証ならびに、NFRJ18 データを用いたコーホート分析によって縦断的に検証することが必要である。

## [文献]

Allen, T. D., & Eby, L.T., 2004, "Factors related to mentor reports of mentoring functions provided: Gender and relational characteristics," *Sex Roles*, 50(1), 129-139.

- Aronson, P., 2007, "Growing up alone: The absence of young women's positive life models," R. Macmillan (Ed.), *Advances in Life Course Research*, Vol.11, Amsterdam: Elsevier Science Ltd., 69-95.
- Hamilton, S. F., & Darling, N., 1996, "Mentors in adolescents' lives," K. Hurrelmann & S. F. Hamilton (Eds), *Social Problems and Social Contexts in Adolescence: Perspectives across Boundaries*, New York: Aldine de Gruyter, 199-215.
- 嶋崎尚子, 2009, 「成人した子とのつながり——親からみた親子関係」藤見純子・西野理子編『現代日本人の家族——NFRJ からみたその姿』有斐閣, 154-165.
- , 2010, 「移行期における空間的距離と親子関係」岩上真珠編『<若者と親>の社会学 ——未婚期の自立を考える』青弓社, 105-124.
- 田淵六郎, 2009, 「結婚した子と実親・義理の親とのつながり——子からみた親子関係」藤見純子・西野理子編『現代日本人の家族——NFRJ からみたその姿』有斐閣, 166-185.
- 正岡寛司, 1993, 「ライフコースにおける親子関係の発達の变化」石原邦雄・佐竹洋人・堤マサエ・望月嵩編『家族社会学の展開』培風館, 65-79.
- Moen, P., & Orrange, R. M., 2002, "Careers and lives: Socialization, structural lag, and gendered ambivalence," R. A. Settersten Jr., & T. J. Owens (Eds.), *Advances in Life Course Research*, Vol.7, Amsterdam: Elsevier Science Ltd., 206-311.
- 保田時男, 2004, 「親子のライフステージと世代間の援助関係」渡辺秀樹・稲葉昭英・嶋崎尚子編『現代家族の構造と変容——全国家族調査[NFRJ98]による計量分析』東京大学出版会, 347-365.
- 大和礼子, 2004, 「介護ネットワーク・ジェンダー・社会階層」渡辺秀樹・稲葉昭英・嶋崎尚子編『現代家族の構造と変容——全国家族調査[NFRJ98]による計量分析』東京大学出版会, 367-385.
- , 2009, 「援助資源としての家族」藤見純子・西野理子編『現代日本人の家族——NFRJ からみたその姿』有斐閣, 199-208.

## **The Consultative Interactions between Parents and Children**

**Naoko SHIMAZAKI**

**Waseda University**

This paper focuses on observations of the dynamic state of consultative interactions between parents and children in an intermediate stage of the parent-child relationship. The mother-daughter relationship has a high incidence of both of the following dynamics: “the child turns to the parent for advice” and “the parent turns to the child for advice.” In particular, “the child turns to the parent for advice” dynamic is particularly pronounced when the daughter’s life stage is that of a youngest child who is still preschool age or younger. For the mother-son relationship, cohabitation demonstrated a facilitating effect on the incidence of consultative interchanges. In contrast, father-son and father-daughter relationships exhibited trends that changed in accordance to respective life stages.

Attempts to discover a model for the developmental process of consultative relationships for father-son and father-daughter pairings resulted in the following progression: (1) the child turns to the parent for advice, then (2) neither party solicits the advice of the other, and finally (3) the parent turns to the child for advice. This pattern was also the central pattern for mother-son relationships; however, in situations where parent and child cohabit, the following pattern can be anticipated: (1) the child turns to the parent for advice, then (2) both parent and child solicit advice mutually from each other, and finally (3) the parent turns to the child for advice. This pattern of relationship development is expected in mother-daughter relationships, regardless of whether or not mother and daughter cohabit. This model requires future longitudinal analysis.

This paper elucidates the following points. First, the nature of mutual consultations between parents and children at an intermediate stage of the parent-child relationship differs by the gender composition of the relationships. Specifically, these consultative relationships are more active in mother-child relationships than father-child relationships. Furthermore, although interaction in the mother-son relationship is promoted by cohabitation, the mother-daughter relationship is independent of physical proximity, continuing with active interaction regardless of physical distance.

**Key words and phrases:** consultative interactions, intermediate stage parent-child relationships, life stage, mother-daughter relationship